

## 江戸期の「書籍目録」に見える『金鰲新話』

——朝鮮王朝の小説はどう紹介されたか——

邊 恩 田

はじめに

江戸時代に入り、出版文化が盛行するにもなって、書林・書肆は、出版物を紹介し販売を勧める目的で「書籍目録」を出すようになった。

朝鮮王朝時代初期の文人、梅月堂メウオルジ キム・シンスウ金時習（一四三五一—一四九三）が著した漢文伝奇小説『金鰲新話』は、日本に伝わり、さらに和刻本として出版された注目すべき作品であり、現在のところ承応二年（一六五三）、万治三年（一六六〇）の刊記、寛文十三年（一六七〇）の奥付の十一本が伝存している。<sup>①</sup>

『金鰲新話』は、江戸時代の日本文学に大きい影響を及ぼしたが、浅井了意の怪異小説集『伽婢子』（寛文六年・一六六六）においては、翻案という方法で受容され結実している。

では、和刻本の『金鰲新話』は、江戸期の書籍目録に書名が載せられ紹介されていたのであろうか。また、それはどのようなものであったか、非常に興味深いことである。本稿はその報告である。

### 一 江戸期の「書籍目録」に見える『金鰲新話』

江戸期にどのような書籍目録があったかについては、すでに慶應義塾大学斯道文庫編になる『江戸時代書林出版書籍目録集成』<sup>②</sup>（全三冊）が備わっている。

阿部隆一氏は、その「解題」において、書籍目録というのは、「出版業者が販売を目的とした出版物を掲載」<sup>③</sup>したものであり、享和（一八〇一—一八〇四）頃までの二十数種が現存するとし、二十三種を示し紹介された。

そして、このうち、最も早い時期の書籍目録は、「刊記がなく刊

江戸期の「書籍目録」に見える『金鰲新話』

年が不明<sup>④</sup>ではあるが、「寛文五年から六年の間に刊行されたと思われるべき」『和漢書籍目録』であるとし、それをはじめとして十五本の影印が公開された。

では、この十五本の書籍目録に、『金鰲新話』の記載があるかどうか調べたところ、十一の書籍目録（後掲する(2)～(12)）に、書名の掲載が確認できた。

ところで、筆者は最近、同志社大学図書館の蔵書のなかに、『新板書籍目録』（一冊、図書記号025. 1/S9300）という板本があることを知った。

本書は、阿部氏が先の解題において、「東寺観智院蔵万治二年写本『新板書籍目録』一冊<sup>⑥</sup>」という写本<sup>レ</sup>について、紹介だけを読んだのであるが、まさにその写本の元になった本（一伝本）ではないかと考えられるのである。

内容を確認したところ、後掲する(2)『和漢書籍目録』と同様の編纂方式であり、部類分けも二十二部門であり、内容が全く同じであった。本書は、無刊記ではあるが、阿部氏は、その成立年代について「万治二年<sup>⑦</sup>」としつつも、残念ながら「現存板本が発見されない」とされた。しかし、「書林の手になった開板書籍目録等の先駆をなす記念すべき文献<sup>②</sup>」であると評価されている。

つまり『新板書籍目録』は、現存する最古の書籍目録として、高

く評価される目録となる。

したがって、本稿では、この同志社大学図書館所蔵の『新板書籍目録』本を、まず(1)として掲出することとした。都合、江戸期の十二本の書籍目録において、『金鰲新話』が紹介されていることになった。以下詳しく見ていきたい。

さて、書籍目録には、分類の仕方によって、部類分けによるものと、いろは分け（書名の仮名順）によるものの二種があるが、それぞれに『金鰲新話』の記載があった。すなわち京・大坂を中心とする上方での部類分け目録だけでなく、延宝初め頃から江戸においても、宣伝に付され販売されていたということである。

では、これらの書籍目録に、『金鰲新話』がどのように記載されているのかを、二種の目録ごとに、時代順に次に提示しよう。原文を図版に示す。

○部類分け目録

(1)無刊記（一六五九年（万治二）推定）『新板書籍目録』

「二冊 金玫瑰新話」

(2)無刊記（一六六六年（寛文六）推定）『和漢書籍目録』

「二冊 金玫瑰新話」

(3)一六七〇年（寛文十）刊『増補書籍目録<sup>作者付大意</sup>』

「二冊 金鰲新話 萬福寺榜浦記」

- (1) 『新板書籍目録』
- (2) 『和書籍目録』
- (3) 『増補書籍目録』作者付大意
- (4) 『増補書籍目録』
- (5) 『古書籍題林』
- (6) 『広書籍目録』
- (7) 『新板書籍目録』作者付大意
- (8) 『新書籍目録』
- (9) 『書籍目録大全』
- (10) 『増補書籍目録大全』
- (11) 『益書籍目録大全』
- (12) 『増補書籍目録大全』

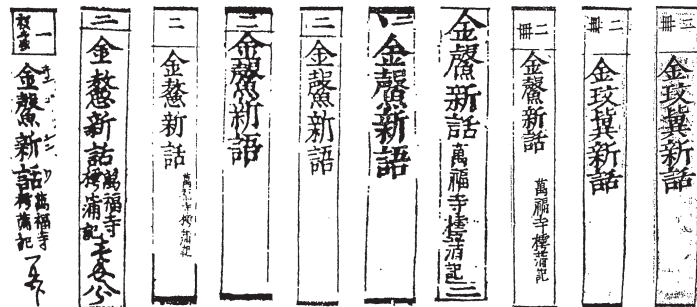


図 各書籍目録の原文

- (4) 一六七一年(寛文十一) 『増補書籍目録』  
『金鰲新話 萬福寺栲浦記 二』
  - (5) 一六七五年(延宝三) 『古書籍題林』  
『一 金鰲新話』
  - (6) 一六九二年(元禄五) 『広書籍目録』  
『一 金鰲新話』
  - (7) 一六九九年(元禄十二) 『増補書籍目録』作者付大意  
『一 金鰲新話』
  - いろは分け目録
  - (8) 一六七五年(延宝三) 『新書籍目録』  
『一 金鰲新話 萬福寺栲浦記』
  - (9) 一六八一年(天和一) 『書籍目録大全』  
『一 金鰲新話 萬福寺栲浦記 一 夕八分』
  - (10) 一六九六年(元禄九) 『益書籍目録大全』  
『一 金鰲新話 萬福寺栲浦記 一 夕五分』
  - (11) 一七〇九年(宝永六) 『増補書籍目録大全』 (10)の増修版  
『一 金鰲新話 萬福寺栲浦記 一 夕五分』
  - (12) 一七一五年(正徳五) 『増補書籍目録大全』 (10)の増訂版  
『一 金鰲新話 萬福寺栲浦記 一 夕五分』
- 江戸期の「書籍目録」には、何が記載されているのかについて、

江戸期の「書籍目録」に見える『金鰲新話』

中野三敏氏は、

巻頭に内容の惣目録を置いて、以下、その一つ一つの分類に相  
当する出版物の書名、著者名、冊数、板元等を記す。<sup>⑧</sup>

という内容の本であるとされる。

では、『金鰲新話』の場合、どのように紹介がなされていたのか、  
分類カ所、書名、著者名、冊数、板元などについて、各目録におけ  
る記載内容を確認しながら、その特徴について明らかにしていきたい。  
い。

まず書名については、(1)から(12)までの書籍目録に記載があったが、  
しかし「鰲」の字には、誤字あるいは異体字が刻されていて、以降  
の(12)まで「鰲」の字にはなっていない。

また、(5)においては、タイトルの「話」を「語」字に誤刻してい  
る。それは、(6)と(7)にそのまま続いたが、江戸の目録の方には、そ  
の誤刻は見られない。おそらく正されたのであろう。

次に、分類の方法であるが、部類分けの目録である(1)と(2)では、  
「外典」すなわち儒教関連書、広い意味での「漢籍」として「金鰲  
新話」を取り扱っていた。「金鰲新話」の書名の直前には、「剪燈新  
話」「列女伝」「三網行実」などの書名が並んでいるのを見れば、こ  
れらの中国や朝鮮の作品も、同類の書と考えられていたことがわか  
る。

ところが、寛文十年刊の(3)になると、「儒書」部門に配されてい  
るものの、「儒書」部門には、さらに下位分類として、

経書 歴代 理学 道書 伝記 古事

という六つの項目が設定されて、細分類されており、そのうちの  
「古事」に収められている。

(5)、(6)、(7)の目録においても、「故事」に収められており、本の  
取り扱いに変化があり詳細になっていることがわかる。おそらくそ  
れは、伝奇小説である『金鰲新話』についての認識が深まったから  
ではないかと、判じられるのである。

一方、江戸で出版された最初の書籍目録であり、いろは分けの嚆  
矢とされる延宝三年刊の(8)では、「き」の「儒書」に置かれていて、  
以降の目録(9)と(10)でも同じであり、(10)の増訂版である(11)や、(10)の修  
版である(12)も、同じ板木であり、同じである。

中国の『剪燈新話』が「志怪」小説であるにもかかわらず、「儒  
書」のなかの故事扱いになっていることについて、富士昭雄氏が、  
当時の書籍目録の編者は、妖艶な『剪燈新話』も即物的功利的  
な故事雑著と同格に扱われているのである<sup>⑨</sup>

と指摘されたように、非常に興味深いことである。

三点目に指摘すべきことは、(3)の目録が、「萬福寺楞蒲記」とい  
う作品題を付記しはじめたことである。

しかしこの「萬福寺楞、蒲記」とあるのは、正しくは一九九九年発見された朝鮮刊木版本の原文「萬福寺楞、蒲記」であって、『金鰲新話』の五篇の作品、

「萬福寺楞蒲記」

「李生窺牆傳」

「醉遊浮碧亭記」

「南炎浮州志」

「龍宮赴宴錄」

の第一作である。

すなわち、代表的な作品題を添えることで、本の紹介がより詳細になされたということになる。そしてそれは、(3)の目録が、タイトルに「作者付大意」と銘打っていることと符合することであった。

作品題を付記することは、後続する(4)には見えるが、延宝三年刊の(5)や、(6)、(7)にはいずれも見られず、江戸のいろは分け目録(8)に引きつがれており、以後これが定着しているのがわかる。

さて次に、本の「値段」を記しはじめたのは、(9)の天和元年『書籍目録大全』が最初であり、「苞勿八分」と売価を提示している。

(9)本の扉(見返し題)には、「新撰書籍目録大全 直段付大意」とあって、「直段付大意」という通り、「直段」を付し、「大意」として作品題「萬福寺楞蒲記」を付けて、より詳しく本を宣伝している

江戸期の「書籍目録」に見える『金鰲新話』

わけである。

五点目の特徴として、「ふりがな」の付記があげられる。(10)では、書名に仮名で「きんご しんわ」と「読み」を刻している。これは、先行の目録類にはなかったことである。ただ、「きんごう」とあるべきところの「う」字の刷りが見えないのは、板木の「欠損」によるものであろうと判じられる。

さて、最後に指摘すべきは、「板元」のことである。板元の名を入れた書籍目録は、江戸における元禄九年刊の(10)が、最初である。

「福森」とあるのは、福森兵左衛門のことで、『慶長以来書買集覧』によれば、京の五条通りの板元である。

実際、福森は、和刻本『金鰲新話』を「寛文十三丑年仲春／福森兵左衛門板行」の奥付で売り出しているが、(10)にある通り「一冊」本であり、現存する三伝本を筆者は確認している。<sup>⑩</sup>

板元の福森は、浅井了意の著作や、林羅山の『怪談全書』(元禄十一年・一六九八)といった怪異物を刊行した板元でもあるが、江戸にも進出して、『金鰲新話』を目録に載せ販売していたことが明らかとなった。

このように、書籍目録に見える『金鰲新話』に関する情報が、しだいに詳しくなっていく所に、当代の出版における商業的な盛行のほどがうかがい知られるのである。

以上、いくつかの特徴を指摘しながら書籍目録の実相を見てきたが、和刻本『金鰲新話』は、無刊記書籍目録の万治二年頃から正徳五年頃までのおよそ六十年の期間だけを見て、京都、大阪、江戸において、積極的に宣伝されていたことが確認できた。もちろんそれ以降も、出版や販売は続いていたと考えられる。

\*

さてここで、江戸期の「書籍目録」ではないが、『倭板書籍考』<sup>12)</sup>という書に、『金鰲新話』についての解説が見えることについて述べておきたい。

『倭板書籍考』は、長澤規矩也・阿部隆一氏の「解題」によれば、幸島宗意の著になる、元禄十五年（一七〇二）の刊本であり、その内容は、慶長から元禄に至る間に出版された和漢書についての解題といえる内容になっているという。

その巻七に、書名を一字誤って「金鰲新話」と記したうえで、次のように説明している。

一本アリ文意剪燈新話ヲ模シタル書ナリ高麗文士ノ作也

まず、「一本アリ」というのであるから、『金鰲新話』の二冊本を著者は見たことになる。先に検討したように、同時期の書籍目録である(10)（元禄九年刊本）において、初めて「一冊」という冊数が見えているので、この点齟齬はないようである。

そして続いて、作品の内容に関して、『剪燈新話』を模した書、つまり模倣した書であるという。とするなら、著者は、『剪燈新話』の内容をよく知っていて、『金鰲新話』をも読んだ上で、両作品を比べて「模シタ」と評したということになるか。<sup>13)</sup>模したという評価は皮相的で短くはあるが、中国の『剪燈新話』と朝鮮の『金鰲新話』とを対比した作品評が、元禄十五年の時点で日本の識者にあった点に、注目しておきたい。

ただし、作者については、「高麗文士」とするだけで、号の「梅月堂」や著者名（金時習）は記していない。

## 二 冊数について——刊記の問題

筆者がこれまで調査した現存する和刻本『金鰲新話』は、すべて一冊本に綴じられたものであった。

ところが、右掲出の書籍目録には、「二冊」とする方が圧倒的に多く、疑問が残っていたが、原本に当たり調べていく過程で、その疑問は解かれた。再度の伝本調査時に注意を払いながら原本を見ていたところ、「小口書き」がその疑問を解くきっかけとなった。

筆者は、京都大学附属図書館蔵本『金鰲新話』の調査時に、本を綴じている背の部分の四十五丁ある本文の用紙が、大きく二つのまとまりのある部分に分かれようとする傾向があることに、気付いた。

さらにまた、本を綴じた綴じ糸の部分を見たところ、やはりそこにも二つの部分に分かれる傾向が、はっきりと見てとれたのである。

これは、もともと二冊本の分冊であった本を、二冊を重ねて一冊本に綴じた本であることを意味するのではないかと、筆者は考えた。そこで本の底を見たところ、もとの本とおぼしい底の上下二箇所  
に「小口書き」があつて、上部に、

金話本 ケン

下部に、

金話本 コン

という墨書きが確認できた。上下の二冊の本への、書き入れであつた。「ケン」「コン」というのは「乾坤」のことで、上下や二つ、あるいはセツトを意味する語である。「小口書き」について、

和本は書棚や本箱に横積みするのが通例で、従つて検索の便のために、書物の下小口にその書名や巻冊数を横書きにしてあることが多い。これを「小口書き」と称する。<sup>②</sup>

と説かれるように、本の背の方から左方に横書きされたこの小口書きは、まさしくこの本が、もとは二冊であつたことを証明している。

ところでこのことは、先掲した「書籍目録」の記事に確認ができる。(1)(2)をはじめ(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)までの目録ではすべて「二冊」と

しているが、(10)と、(10)の増訂版である(11)、(10)の修版である(12)では、「一冊」とあるからである。

となると、現存する和刻本『金鰲新話』はすべて一冊本ではあるものの、もともとは二冊本として売られていたということになる。そして後には、この二冊の本を合綴して一冊本に作り直したか、あるいは当初より二冊分を一冊に綴じて販売した、ということになる。

したがって以上のことから、和刻本『金鰲新話』の場合、たとえその伝本の刊記が、承応二年（一六五三）や万治三年（一六六〇）であり、あるいは奥付が寛文十三年（一六七三）であつたとしても、実際に、摺刷された時期、綴じられた時期、販売の時期については、必ずしも刊記のいう年時ではない場合があるということになる。刊記と異なる可能性があるということに、注意しなければならぬ。この点が、和刻本を理解し、取り扱うにおいて、もっとも重要な留意点となる。

#### 注

- ① 邊恩田（「資料紹介」和刻本『金鰲新話』の諸本）『同志社国文学』第65号、二〇〇六、一一。「資料紹介」和刻本『金鰲新話』の諸本（続）『同志社国文学』第72号、二〇一〇、三。
- ② 慶應義塾大学斯道文庫編『江戸書林出版書籍目録集成』井上書房、一

九六二。

- ③ 注②の「解題」、一一頁。
- ④ 注②の「解題」、一二頁。
- ⑤ 注②の「解題」、一三頁。
- ⑥ 注②の「解題」、一〇頁。
- ⑦ 注②の「解題」、一一頁。
- ⑧ 中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』岩波書店、一九九五、九九頁。
- ⑨ 富士昭雄「伽婢子と狗張子」『国語と国文学』一九七一、一〇、三四頁。
- ⑩ 井上和雄編、彙文堂書店、大正五。
- ⑪ 注①の報告を参照されたい。
- ⑫ 長澤規矩也・阿部隆一編『日本書目大成』第三卷、汲古書院、一九七九。
- ⑬ あるいは伝聞などに依った評かとも考えられる。
- ⑭ 注⑧の二六二頁。なお「小口書き」は、ほかの和刻本『金鰲新話』において異なる表現で確認ができています。